大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

Klaus Kordon : 1904年-パウレ・グリュック-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ペピン, ハンス・ヨアヒム
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006008

Klaus Kordon

ハンス・J・ペピン

1943年、東ベルリンに生まれたクラウス・コルドンは、現在ドイツで最も著名な、しかもなお期待されている現代児童文学作家の一人である。

コルドンの著作は、自国の歴史やその現代に及ぼす影響をドイツの若い世代に、身近なものとして示そうとするものであり、記録的なベストセラーとなっている。最近では特に二つの作品が注目を集めている。一つは、1994年に書かれ、エーリヒ・ケストナーに対する思いの溢れた彼の伝記『ケストナー　ーナチスに抵抗し続けた作家ー』(那須田淳・木本栄共訳、偕成社、1999年刊)である。この著作はドイツ児童文学賞を受賞した。もう一つは、1999年に出版され、以下に訳出した「パウレ・グリュック」が所収されている同名の短編集『パウレ・グリュック』である。この短編集は、20世紀を10年ごとに分け、それぞれの時代の中で、青少年の生活が時代の移り変わりと共にどのように変化しているかを刻銘に描き出している。そして特に、それぞれの時代の中で、青少年の間にどのようにして暴力が起こるかということを、現代の青少年に伝えようとしているのである。そのため、クラウス・コルドンの作品を読むことは、ドイツのギムナジウム５・６年生の国語のカリキュラムにとって不可欠なものとなっている。

クラウス・コルドンは先のドイツ児童文学賞のみならず、ドイツの文学界において何度も大きな賞を獲得している。だが、日本では10冊もの翻訳書が出版されているにもかかわらず、残念ながらまだあまり彼の作品については知られていない。現代のドイツと日本の若い世代には共通の問題があることは周知のとおりであるが、コルドンの作品や彼の見解は、共通の問題を抱える両文化の対話ということのためだけではなく、共通の問題をより深く理解するためにも大いに役立つであろう。

以下は短編集『パウレ・グリュック』の冒頭に収められた短編「1904年　ーパウレ・グリュックー」の本邦初訳である。翻訳作業は、「コルドンを読む会」と共同で行ったことをここに記しておく。この会のメンバーは、牛尾重彦、佐藤義雄、秦地さつき、真津千代子、三村利恵、渡辺茂（五十音順）の六名である。今回の訳出にあたっては、訳についてのさまざまな意見をまとめるという骨折りな作業を佐藤氏が引き受けてくださった。惜しむべきことは、メンバーの一人である渡辺氏が、2001年1月に急逝されたことである。この場で改めて哀悼の意を表したい。最後になったが、校正の際に、ご多忙にもかかわらず原稿をお読み下さり、数々の有益なご助言を賜った大阪音楽大学教授・松本ヒロ子先生に心から深く感謝申し上げる。

１９０４年　－パウレ・グリュック－

ハンス・J・ペピン
コルドンを読む会　共訳

ノイマン、マイヤー、ペルジケ　－　新聞を郵便受けに差し込んで、ほんの少し呼び鈴をならす。そして次の家へ。

パウレは４階から再び駆け下り、玄関から飛び出す。通りはまだ暗く、ガス燈だけが弱々しい光を投げかけていた。そして未だに雨が降っていた。

２４番棟。ここではパウレは３階まで駆け上がる必要がある。

オットマール・シュルツェ。新聞をドアの郵便受けに差し込んで、呼び鈴をならし、駆け下りる。

パウレはちょっと計算してみた。彼が新聞を50部配り終えるためには、29のアパートをまわらなければならず、全部で67階分駆け上がってはまた駆け下りなければならない。しかし、これはまだましだ。もし毎回５階まで駆け上がらなければならなかったとしたら、116階分になっていただろう。

ヨハネス・シュナイダー。最後の配達先だ。しみったれのちびシュナイダー。パウレは密かにこう名付けていた。というのも、クリスマスの時でさえ１ペニッヒの駄賃もくれなかったからだ。

また通りへ飛び出す。パウレは急がなければならない。最後のお得意さんから学校まで、ちょうど10分かかる。しかし彼には８分しか残っていなかった。

彼は間に合わなかった。校庭に辿り着いたときには、級友たちはすでに赤煉瓦の建物の中に消えていた。息を切らして廊下を走り抜けた。ひょっとすると教室のドアが閉められる前に、何とか中に入ることが出来るかもしれない。

そう甘くはなかった。パウレはドアをノックしなければならず、それからハインリヒ先生の前に立った。先生はただパウレをじっと見つめ、ため息をついた。「また君か！」

先生の中には、いろいろと些細なことに腹を立てて戸棚から籐の鞭を取り出し、差し出させた両手に一度あるいは何度もその鞭を振り下ろすことで、生徒たちに罰を与える人もいるが、ハインリヒ先生はそのような先生ではなかった。ハインリヒ先生が鞭で一撃を加えるのは、先生に向かって生徒が本当に生意気な態度をとった時にだけであった。そのため、パウレは罰を受けずに、自分の椅子に座り込むことができた。

ハインリヒ先生は歴史の先生なので、彼がしばしばこぼしているように、彼の立場は特につらいものだった。地区の小学校の生徒たちには、そう簡単に歴史にまつわる数字を覚えることはできないものだ。フリードリヒ大王がいつこの世に生まれて、いつこの世を去ったのか、あるいはいつどんな戦争を指揮したのか、先生が答えをききたくて、尋ねたいと思う生徒に質問することはできても、失望するだけであった。ハインリヒ先生は、もし自分がギムナジウムの教師であったなら、あるいは少なくとも女学校で教えていたなら、もっと楽だっただろう、としばしば語っている。この学校の生徒たちはそのうち先生を早死にさせてしまうだろう。

パウレも歴史の年代を覚えていなかった。そしてその他の諸々のことも覚えていなかった。彼がようやく椅子に座った時はいつもへとへとに疲れ切っていた。というのもすでに3時間も前から街を駆けまわって働いていたからだ。

「ノートを開けて！」

パウレはノートを開け、ペン軸を机のインク壷に浸して、ハインリヒ先生がすぐに筆記せようとしていることを待ち受けていた。その瞬間が来た。彼は書き取った。また数字、また戦争、王様、戦い。パウレは、父親が夜に母親を大声でどなりつけていたのを思い出していた。お金が足りず、母親はやりくりができなかった。父親はこう言った。この金でなんとかやってくれ。よその奥さんたちもそうやっているんだ。

ハインリヒ先生の口述筆記はようやく終わりになった。そこで先生は生徒たちが書き取った事柄について解説しだした。パウレは目を閉じた。そのときほんのちょっとだけ彼は眠りたかったのだ。本当にほんのちょっとだけ。2分・間・・だ・・・け・・・・

「グリュック！」

パウレは、驚いて飛び上がった。ハインリヒ先生が彼に何かを尋ねていた。おずおずしながら彼は椅子のそばに立ち上がった。

「君はまた居眠りをしていたんだね？」

パウレは首を横に振った。

「さあ、答えるんだ！」

「いいえ、僕は居眠りなんかしてません。」

「では、私は君に何を質問したのかね？」

用心しながらパウレはベルトルトの方を横目で見下ろしたが、彼はパウレの方に目をやる勇気さえなかった。

ハインリヒ先生は戸棚のところへ行き、鞭を取り出した。遅刻したうえに授業の最中の居眠りでは、ひどすぎる。そんなことに先生は我慢できなかった。

「両手を前に出しなさい！」

パウレは手を差し出し、唇をかみしめた。彼の背後でフーゴがささやいた「グリュックのくせに、またもついてないなぁ。」 パウレは前々から、フーゴには一発くらわせてやらなければと思っていた。その途端、鞭が風を巻き起こして振り下ろされた。激しい痛みが身体の中を走り抜けた。

ハインリヒ先生は、パウレがこのような罰を自分にむりやり与えさせたことで感情を害していた。「二度も留年していてまだ目が覚めないのか」と先生は叱りつけた。「君はいったいどんな人間になるのかね？」

仕置きの際にハインリヒ先生が一撃だけでおしまいにしてくれたのを、パウレは喜んだ。もしこれが、以前の老クラウゼ先生なら、遅刻しただけでも3回は殴られていただろう。

「パウレ・グリュック！お馬鹿なグリュック！パウレ・グリュック！とんまなグリュック！」

太っちょのヤコブがこう叫んでいた。4階の台所の窓からヤコブは覗いていた。パウレは拳骨を振りかざしてヤコブを威嚇したが、ヤコブはただ笑って、額をコツコツ叩いてバカにするだけだった。

パウレは二つ目の中庭を横切って、2階まで駆け上がるために、脇ののぼり階段に足を踏み入れた。

「やっと帰ってきてくれたんだね。」お母さんはすでに着替えを済ませていた。いつもながらお母さんは忙しげだった。お母さんはフリードリヒシュトラーセに行かなければならなかった。そこには夜にようやく開店するレストランがいくつもあって、それらのレストランで掃除をするためであった。お母さんはこのような仕事があることを喜んでいた。パウレが学校に行っている間は、お母さんは小さな子供たちの面倒をみることができたからだ。

パウレは鍋をのぞき込んだ。黄色い豆だけで、肉は一切れもはいっていなかった。

「クルト坊やに気をつけてね！」と戸口でお母さんが叫んだ。「具合が良くないのよ。」

気になってパウレは寝室へ行ってみた。ちっちゃな弟はベッドで横になり、かすかにシクシク泣いていた。双子の弟フリッツとフランツは床板の上でビー玉遊びをしていた。床板の節穴が深く窪んで、ビー玉遊びにちょうどよかった。妹のオルガはそれを眺めて、双子がいがみ合うと喜んだ。

厳しくパウレは双子からビー玉を取り上げた。「ビー玉がしたけりゃ、中庭でやれ！」

フランツはパウレからビー玉を取り返そうとして躍起になった。しばらくの間は、兄は弟が力ずくで迫るのをそのままにしていたが、もうたくさんだと思って、兄はフランツを突き退けた。怒ってフランツが泣きわめくと、クルト坊やも待っていたかのように泣き出した。

「中庭へ行け！」とパウレは双子を怒鳴りつけた。

「でも外は雨だよ」とフリッツはおずおずしながら口答えした。

「それなら玄関で座ってろ。ここじゃ、お前たちは邪魔なんだ。」実際、彼には双子が邪魔だった。部屋があまりにも狭すぎたのだ。

怒りを露わにしてフリッツとフランツは出ていった。オルガはパウレに向かってあっかんべーと舌を出した。彼女はパウレを怒らせて、自分もパウレにかまってもらいたかったのだ。

「おまえもあっちへ行け！」とパウレは命じた。

「行かないわよ！」

パウレはオルガのところに駆け寄り、彼女を引っ張り上げるとドアの外へ引きずり出した。それから鍵を掛け、廊下でオルガに悪態をつかせておいた。

クルト坊やは相変わらず泣き声をあげていた。パウレはゆっくりとクルトを抱き上げ、お尻を嗅いでみた。

おむつの中がうんちでいっぱいだ！　だが今したのではなく、パウレが帰ってくる前からそうだったのだ。きっとお母さんはおむつがどんな具合か見る暇がなかったんだ。・・・・・

クルト坊やはおむつを替えてもらって眠っており、オルガは友達のグレーテのところへ行ってしまった。パウレは台所に座り、すでにほとんど冷たくなっていた残りの豆を食べた。しかしもう一度かまどに火をおこす甲斐はなかった。というのは、ほとんど石炭がなかったからだ。なんとか再び温かくなるまでにいったいどれくらいかかるのかわかったものではない。

すべてを食べ終わると、パウレは疲れて眠くなった。彼は腕を机の上に投げ出し、頭をその上にのせ夢を見ていた。パウレは目を開けたまま夢を見るのが好きだった。それは楽しいことであり、まるで旅に出ているかのようであった。彼は願っていることを思い浮かべることができる。そして

たいてい彼が思い描くのは、フィリップおじさんの庭であった。・・・・・　庭はこの世に存在する最も美しいものだ。特に夏は美しい。誰かが彼に何になりたいかと尋ねたとしたら、たぶんパウレは庭師になりたいと言うだろう。しかし「君はいったいどんな人間になるのかね？」というハインリヒ先生の質問は決して本当の質問ではなく、単なる非難に過ぎなかった。先生は腹立たしく思ったどの生徒に対してもそう言ったのである。

庭師という仕事は、一日中、新鮮な空気の中にいて、花を植え、木を植え、灌木の枝打ちをし、庭園を造ることを意味していた・・・。そしてフィリップおじさんはこう話していた。すでに２度も留年したような、そんな奴でも庭師になれるんだ。庭師という職業はそんなに賢くなくてもいいんだ。庭師という職業に必要なのは、なんといっても愛だ・・・。

「パウレ兄さん！」

フランツの声だ！パウレは窓辺に行き、中庭を見下ろした。

太っちょのヤコブだ！ヤコブはフリッツの頭を脇の下に抱え込んでいた。パウレは階段を駆け下り、ヤコブが逃げ去るのを見て、彼の後を追いかけた。そしてちょうど中庭の通路の前で捕まえた。パウレは怒りのあまり拳骨でヤコブの顔を殴りつけ、地面に引き倒した。そのうえさらに、ヤコブを打ちのめすために、パウレはヤコブめがけて飛びかかった。双子はパウレを焚きつけたが、パウレ自身も怒っていた。ヤコブがあまりに泣きすぎて鼻ちょうちんをふくらませ、グジャグジャになった顔を目にして、やっとパウレはヤコブを殴るのをやめた。「ひどい目に遭うぞ！また俺の兄弟のうちの誰かに手をあげてみろ！」とパウレはヤコブを脅した。「それと、また窓から俺に何か言ったらひどい目に遭わすぞ！」

ふくれっ面でヤコブは顔の血をぬぐった。「ハインリヒ先生に言いつけてやるからな」とヤコブは泣きわめいた。

晩になって、お母さんが帰ってきた。疲れ切ってお母さんは台所の腰掛けに座っていた。石油ランプの灯りの下で、痛む足をさすっていた。「お父さんはまだ帰っていないのかい？」

黙ってパウレはうなずいた。パウレはお母さんの留守の間にかまどに火をおこし、食器を洗い、そしてクルト坊やのおむつを何度か巻き替えていた。もう３回もおチビさんはうんちをしていた。家中、おむつの臭いがした。

「クルト坊やは、お腹をこわしているよ。」

「ああ、また！」とお母さんはため息をついた。

フリッツとフランツは玄関口で殴り合っていた。お母さんは二人を引き離し、二人ともに平手打ちを喰わせた。すると二人は泣きわめいた。それからお母さんはクルト坊やをじっと見つめ、パウレはお母さんをじっと見つめた。クルト坊やのお尻は真っ赤だった。お母さんが触っただけでクルトは泣き叫んだ。

「急いでモルさんのところへ行っといで。」お母さんは額にしわを寄せた。「塗り薬をもらって来るんだよ。」

「お金はあるの？」

「つけにしてもらいな。」

「でもモルおばさんは、もうつけで売るわけにはいかないって言ってるよ。」

「だからって、どうしたらいいのさ？」やにわにお母さんはわめきだした。「クルト坊やのお尻が、身が見えるほどすりむけるまで待ってろって言うのかい？」

パウレは背中を向けて、出ていった。階段のところで家へ帰ろうとしていたオルガに出会った。「おいで」とパウレは言った。「お前は泣くんだぞ。」

オルガは上手に泣きわめくことができた。モルさんは、初めは厳しく、無愛想に振る舞い、パウレたちに何度も、すでに多額の貸し売り金額が書き記されたグリュックの名前のあるメモを差し出していたが、すこしずつ優しくなっていった。モルさんは、パウレと途切れることなく泣きわめいてますます騒々しくなるオルガを店から追い出したかったのだ。「さっさと出てお行き！」とモルさんは叱りつけた。「もう何一つ、つけで売ることは出来ないんだよ。」

「でもクルト坊やが」とパウレが言う。「赤剥けのお尻の肉が見えるんだよ・・・」そしてオルガはまたも、サイレンのように大声で泣いた。

「おや、まあ！」と一人のお客がため息混じりに言った。「なんてかわいそうなおチビちゃん！」

そこで、モルさんは戸棚に手を伸ばし、塗り薬の入った瓶をパウレの前に置いた。「だけど、これで最後だよ！慈善団体じゃないんだから。わかったかい？」

「ありがとう！」パウレとオルガはもう外にいた。オルガは涙をぬぐい去り、兄の傍らで飛び跳ねていた。「あたしは泣けるのよ。誰だってあたしにはかなわないわ。」とオルガは勝ち誇ったように叫んだ。

パウレはただ笑っていただけだった。

お父さんの仕事仲間のエルヴィンが台所でお母さんの横に座っていた。そしてお母さんは青白い顔をして黙り込んで座っていた。そっとパウレは塗り薬の瓶をテーブルの上に置き、その近くに座った。オルガは大人たちをぼんやりと眺め、やがて寝室へ消えていった。大人たちがひどくまじめな顔をしているときには、子供がその場にいなくなってはじめて大人たちが話をするのだということを、オルガは知っていた。

「お父さんがどうかしたの？」と、オルガが出ていった時にパウレが尋ねた。

エルヴィンは物思いに沈みながらうなずいた。「奴らがあいつを首にしたんだ。・・・で、今頃はディッカー・カールで飲みつぶれているさ。」

「首にされた？　それで・・・　どうして？」

「どうしてだって？」エルヴィンは嘲るように笑った。「あいつは口ごたえしたんだ。こんな賃金でやっていけない、たくさん稼ぐために、安全装置もなしで働いてる、それなのに十分にはもらってない、って言ったんだ。」

じゃあ、新しい穿孔機がどんなに危険なものであるか知っていたけど、お父さんはあえて安全装置を使わなかったんだ。去年は同僚の一人が片手を失った。——同じ機械で。そしてお父さんはお母さんに軽率なまねはしないと、約束していた・・・。

「あたしはうちの人を迎えにいかないよ」とお母さんは言った。「あの人が飲み過ぎて死んじまったって、かまやしない。」

「俺たちはもうこれ以上我慢できない」とエルヴィンが言った。彼の唇は、怒りで真一文字に閉じられていた。「もうこれ以上人間のくずのように扱われてたまるか！　ちょっとでも口ごたえしたら　－その途端、出ていけだ！いったいどこにそんな話があるっていうんだ？　もう一度こんなことが起こってみろ、俺たちはストライキするだけだ。」

「たった一人のためにかい？」お母さんは疑わしげに見つめた。

「たった一人のためじゃない。今日はクルトだったが、明日は他の誰かだ。あさっては俺の番だ。俺たちは、そんなふうに俺たちを扱わせておくわけにはいかないんだ。」

お母さんは力なく肩をすくめただけだった。「二週間後には家賃の支払期限なのよ。あたしたちはもう２ヶ月も滞納してるんだよ。あたしがどうやって家賃を払ったらいいか、あんたに言うことができる？　それなのに、あの人ときたら最後の１ペニッヒまで飲んじまうのかい？　あたしたちのことを考えもしないで。」

「あいつはあんたたちのことを考えているさ」とエルヴィンは反論した。「だからあいつは飲んでるんだよ。」だが彼はパウレの方に向き直って言った。「その気があるなら、ちょっと稼いでみないか。新聞配達じゃ、ろくな稼ぎにはならないだろう。」

「俺が？　いったいどこで？」

「暖房炉でだよ。ホールＡで、若い石炭運びを探してるんだ。手押し車で炉まで、石炭を運んでいく仕事だ。もしその気があるなら、仕事を回してくれるよう、親方に口をきいてやるよ。奴は俺の友達なんだ。」

パウレはただうなずいた。お母さんはパウレを見つめていたが、何も言わなかった。

「じゃあ、いつから始められるの？」とエルヴィンはなおも知りたがった。

「すぐに。」とお母さんが答えた。「もうすぐ復活祭だわ。どっちみち学校を追い出されるに決まってるんだから。」

「よし！」エルヴィンは立ち上がった。「じゃあ、明日10時に顔を出しな。」エルヴィンはまずパウレに、それからお母さんに手を差し出した。そのとき彼女にこう言った。「元気を出しな、うまく行くって。」

エルヴィンが出ていった時、お母さんは両手で自分の顔を覆って嘆いた。「最後のお金まで飲んじまうなんて！どうしてこんな目に遭うんだろう！」

すぐにパウレは玄関の方に行った。「父さんを連れて帰ってくるよ。」お母さんは疲れた様子でうなずいた。「だけど追っぱわれないようにするんだよ。おまえが父さんに殴られたとしてもね。お金なしじゃ済まないんだからね。」

注意してパウレは暗い階段の吹き抜けを通って中庭へ降りていった。中庭はそれほど暗くはなかった。というのは、すでにたくさんの窓の奥で、石油ランプが煤をたてながら燃えていたからである。用心深く、薄気味悪い中庭の回廊をパウレは通っていった。

庭師のことなんか、ばかばかしいことだった。そんなことはとっくにわかっていた。パウレはただそのことを夢見ていただけであった。そしてお父さんがいつも言っているように、夢なんてものは、泡のようなものなのだ。

通りでパウレは左に向きを変えた。彼は背中をピンと張り、拳を握りしめた。今や彼は体中のす

すべての勇気をかき集めなければならない。なぜなら、酔っぱらいの男たちよりも不快なものは何もなかったからだ。彼らを家に連れ戻すために誰かがやって来ようものなら、彼らは特に卑劣になった。

それでもパウレは引き下がるわけにはいかないのだ！